

服部 祥亮 さん
〔理工学部機械システム工学科 4年次生〕



東條 政利 さん
〔1991年 文学部社会学科社会学専攻 卒業〕



クラーク記念館 山室軍平のレリーフ前にて

映画監督 ■『地の塩 山室軍平』10月21日(土) ロードショー開始

東條 政利 さんに聞く

社会の底辺で苦しむ人々のために、数多くの実践的な慈善活動に邁進し、日本の社会福祉の先駆者として礎を築いた山室軍平。その人間愛の生涯を映画化した東條政利監督に在学生在が取材しました。

今回の同志社人

東條 政利 さん

〔1991年 文学部社会学科社会学専攻 卒業〕

とうじょう・まさとし 1968年生まれ、新潟県出身。KYOTO 映画塾を卒業後、三池崇史監督、堤幸彦監督、柳町光男監督などの作品に助監督として携わる。初監督作品は映画『9/10 ジュウブンノキウ』（2006年）。以後、数多くの映画、テレビドラマの監督を務めている。

今回のインタビューー

服部 祥亮 さん

〔理工学部機械システム工学科 4年次生〕

はっとり・よしとか 愛知県出身。少年の頃からシステマティックな機械の作動に魅力を感じ、高校時代に航空宇宙工学の分野を目指す。現在、ロケットエンジンのシールを研究中。課外活動では、1年次生の時から所属している同志社グリークラブの幹事長として活躍している。

その愚直なまでの情熱に 圧倒され、感銘を受けた

服部 山室軍平について東條監督はどのような感慨をお持ちですか。

東條 一昨年の10月に映画化を決意し、本格的に資料を読み込み、取材を重ねながら構想を練り上げていきました。山室軍平の人生の足跡を辿る中で、何よりも心に深く響いたのは、「愛のために生きる」という彼の情熱です。その一途な思いに圧倒され、感銘を受けました。それで、山室軍平が行なった業績を描くのではなく、彼の情熱を描く映画にしたいと考えました。

軍平は明治5年(1872年)に岡山県の貧しい農家に生まれます。体が弱かった軍平を思い、母は「無事に育ちますように、ちいとも人様の役に立つ人となりますように」と祈りました。そしてその代わりに、当時のご馳走だった卵を生涯食べないと誓います。この母の願いに、軍平は一生を賭して応えようとして生きています。貧しさ故に9歳で質屋に養子に出されますが、15歳で義父の家を飛び出し、東京で一人働きながら生きることとなります。そこでキリスト教と出会い、これこそが人を救うものだと確信して夢中になって学びます。そして新島襄を慕って同志社に入学します。映

文化博物館のフィルムシアターに通い、日本映画の古い作品を夢中で観ました。特に1930年代と1950年代の日本映画の名作には圧倒されました。大学卒業後はKYOTO映画塾のディレクターコースに入り、1996年(平成8年)に映画『ピーター・グリーンナウェイの枕草子』に制作スタッフとして参加し、これを機に映画界に入りました。

服部 助監督の時代に、心に深く刻んだ教えはありましたか。

東條 三池崇史監督、堤幸彦監督、柳町光男監督などの作品に助監督として携わりました。いずれも、個性際立つ卓越した監督であり、多くの学びを得ることができました。特に心に残っているのは、堤幸彦監督の一言です。広末涼子さんと松田龍平さんが主演の映画『恋愛写真』の仕事をした時、「助監督、辞めたら?」と言われたんです。広末さんが手にメモを書いているという設定で、その内容を考えるのは僕の仕事だったんですが、授業の休講とか、学校のレポートの締め切りとかそんなことを提案しました。そしたら、「お前、助監督、辞めたら?それ面白いと思ってやってるの」と言われたんです。仕事としてではなく、表現者として仕事をしていなかったなと痛感しました。その後、『トリック』でも助監督をして色々面白いネタを作品に仕込んだと思いますので、その反省は生かされたと思っています(笑)。

新島襄が創立した同志社で学べたことは私の誇り

服部 初監督作品や今後の映画製作について聞かせてください。

東條 2006年(平成18年)に撮った映画『9/10 ジュウブンノキュウ』が初監督作品です。同窓会で7年ぶりに再会した高校野球部員9人の記憶の空白の謎を彼らの会話を軸に探っていくシチュエーション・ミステリーです。同窓会の会場の一室での会話を描く映画なので、人が喋っているだけの映画にならないように、登場人物9人の感

情の動きなどを緻密に組み立てて、非常に苦労して撮影しました。現在も作品の構想は何本かあり、どの企画が実現するかはまだわかりませんが、この作品を作ったことがきっかけで私の映画作りへの思いも少し変わったように思います。これまでも増して一作一作に心血を注ぎ、映画への思いを結実させたいと考えています。

服部 同志社大学での学びの日々は大きな糧になっていますか。

東條 私たちの暮らしに大きく影響を及ぼす社会の仕組みに強い関心を持ち、文学部社会学科に入学しました。大学2年次生の時に哲学科の先生に読書会に誘われ、毎週、哲学書を一章ずつ集まって読んでいたんですが、それをきっかけに色々な人たちと読書会をして議論したりするようになり、大変だったのですが、大きな財産になっていると思います。

体育会柔道部も僕にとっては大きな財産です。現役でいた時はわからなかったのですが、卒業して、みんなそれぞれ考え方や生き方が違っていても、ただ同志社で柔道を一緒に練習していたというだけで、先輩や後輩を含めて同じ仲間であるという気持ちが持てて、なぜか心を許せる関係なんです。そのことを不思議に感じますし、感謝しています。私は映画を作るときに人と人との繋が

りや思いというところを強く考えますが、それは学生時代のことが生きているのかもしれませんが。同志社といえば新島先生なのですが、学生時代は新島先生について学ぼうとはしませんでした。今回、この映画を作ることがきっかけとなり、新島先生の本を読み、すごい人なんだとその情熱的な生き方に感銘しました。この映画作りを通じて、同志社の精神である「良心」について考える機会を持てたことに非常に感謝しております。新島先生の同志社で学んだことに今更ながら強い誇りを持っております。

映画公開情報



- 新宿武蔵野館(東京) 10月21日(土)より
- シネマ・クレール丸の内(岡山) 10月21日(土)より
- 京都みなみ会館(京都) 11月11日(土)より
- 第七藝術劇場(大阪) 未定

インタビューを終えて

在学生の全員に観てほしい作品です。
東條監督を通じて映画のすごさを知りました

今回の作品に私が所属している同志社グリーンクラブが特別出演することが決まった時は驚嘆しました。私自身は試験日と撮影日が重なり、残念ながら出ることはできませんでしたが、クラブ内の調整を行い、出演したメンバーは本当に感激していました。社会福祉活動に生涯を捧げた山室軍平が同志社の大先輩であることに、改めて大きな誇りを感じています。在学生全員に観てほしい映画であり、このような素晴らしい作品を手がけられた東條監督に直接お話を聞きたことも、忘れられない思い出になりました。映画づくりに精魂を傾けておられる姿に、果敢に挑み続けることの大切さを学びました。



インタビューー 服部 祥亮 さん
【理工学部機械システム工学科4年次生】